
稲妻戦隊ライレンジャー

咲季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

稲妻戦隊ライレンジャー

【Nコード】

N4263A

【作者名】

咲季

【あらすじ】

高2の極導光の恋物語です。設定は書きながら考えてますのでどうなることやら。(汗

プロローグ（前書き）

初めての作品で設定やらなにも決めていないのですが上手く話しがまとまれば良いですね。

ブローグ

俺は自分の名前が大嫌いだ。

ヤクザ映画にできそうな苗字に、親が光り続けるようにとつけたこの名。

苗字の方はまあ仕方がないだろう。先祖代々受け継がれてきたものに文句を言うのも失礼だ。

問題は「光」という名だ。俺は自分の名に小さなコンプレックスを抱いている。

中学校まではどうってことなかった。まだ自分の将来に不安などなかったし、ただ毎日夕方遅くまで遊んでいればよかったのだ。

しかしそんな毎日も中学まで……いや、高2になった今だからそう言うんだろう。

本当は年を重ねることに感じていたんだ。

自分の名前と自分との格差を…

出会い

「極導光」

朝テストに書いた自分の名前を見て、俺は少し居心地の悪さを感じる。

そして心の中でつぶやいてみる。

（ごくどうひかり…）

やはり違和感を感じる。

この教室で自分の名前に違和感を感じているのは、俺ぐらいのものだろう。

クラスメートが必死に朝テストにしゃぶりついている中で、俺だけが上の空であった。

その間にも時間は過ぎる。あと5分くらいで担任の安藤から終了の声がかかる。

別にテストが嫌いなわけじゃない。勉強はそこそこできる。

ケンカも得意だ。運動神経は良い方だけど運動系の部活に入るつもりもない。だってしんどいし…。

「お前はやればできる」と何度教師から言われたことか…。

「やる気をだせ」とも言われたっけか。「やる気」なんて人生の中で一度も出したことがない（苦笑）

「やる気」を出させる何かが俺には無い。そう。皆無なんだ!!!

「しゅーりょーーうー!!!」

静寂を斬る様に安藤の声が教室中に響いた。

しまった。名前しか書いてない。

「光ー。お前名前しか書いてねえじゃん」

俺の独り言をさえぎったのは隣の席の桂智弘だ。

「あ？うるせえよ」

怪訝そうに繭を上につり上げる。大半の奴は大体ビビッて黙るのだが（俺の柄の悪さも加算されてなのか）桂にはまるっきり通用しない。

「怒んなよ。何？分かんなかったの？いや、お前頭いいかな。女のことも考えてたんだろ？」

それどころか調子こいて更に話し掛けてくる。

「別に」

「あつそ」

俺のノリの悪さに見切りをつけた様に桂は他の奴に話し掛けに言った。

「女ねえ」

ため息とともに独り言をもらしてしまった。

高2となれば彼女の一人は居て、文化祭などに心を躍らせるものなのだろうか。

あいにく俺の初恋はまだであり、彼女も居ない。親友とやらも居ない。

こう思うと何となく寂しい。

（俺は死ぬまでこんな人生なのだろうか）

絶望にも似た想いを抱いているとき回収したテストを数え終えた安藤が口を開いた。

「今日は転校生を紹介するぞー。園田ー入ってこーい」

（転校生？？そつえば昨日言ってたな。まあ俺には関係無いなー）

その転校生を見るまで俺はそう思っていた。

ガラッ…

戸を開ける音と共に教室に入ってきた女の子に俺は……心を奪われるとはこういう事をいうのだろうか…今までに感じたことのないモノを感じた。

彼女の名前は園田ユミ。

俺の心に稲妻は落ちたのであった。

体育

白い肌に赤い頬が映える。黒い瞳には確かな光が宿っている。はつきりと瞳を見たことはないけれど。

あの日俺にでっかい雷をお見舞いした少女、園田ユミ。
俺の遠く前方に座る、彼女の瞳には何が映っているんだろうなあ。
…なんてストーリーカージみたことを思う。今日この頃。

園田がきて一週間。

あの日から俺のあたまんなかは園田の事でいっぱいですよ。そこは否定しない。初めての感情に戸惑ってはいるけど。

だけど今俺が進んでサッカーボールを追っているのは決して園田の気を引きたいとかそんなんじゃない。

うん。たまには一生懸命体育の授業も受けるのもいいかな？と思うただけで。

おんなじグラウンドにいる園田の注目を浴びたいとかそんな下心だけで動かないよ。

あの日から……というか俺は園田と一度も言葉を交わしていない。

テニスラケットを握る園田が見える。周りの女子と楽しそうに談笑していた。

（クラスの奴とも馴染めたんだな……。）

[illegible]

野太い声が俺の名を呼ぶのでハッと我にかえった。

「てめえこらあ！！！！珍しくやる気だしたと思ったら、いつまでボウッとしてるつもりだあああ！！！」

必要以上に大きな声で俺を呼ぶのはサッカー部の太田だ。

ふと向こうを見るとボールが転がっていた。

「ああ…取ればいいのね？」

気の抜けた質問をすると太田のダルマの様な顔がさらにダルマらしくなった。

「今同点なんだぞお！？チャンスは生かすんだろぅがああああ！！
??？」

俺はコイツが好きじゃない。そもそも熱血タイプは苦手だ。

（たかがクラス対抗のサッカーゲームだろうがぁー。）

そんな事を思いながらボールを追う。

案外早く転がるボール。後少しと思いながら追い上げるも先へ先へと行ってしまふ。

1メートルほどの間隔をうまく保って転がるボール。

俺はヤツキになっていた。何だかボールに踊らされてる様な気がして。

コツンツ・・・

気がつくと、ボールは止まっていた。いや止められていた。

園田ユミによつて。俺は驚いた。何故男子の方に園田が居るのがか理解できなかったんだ。

でもすぐに理解した。

ボールが女子の方に転がってきたんだった。あんなに大きく聞こえていた太田の声が犬の遠吠えの様に聞こえていた。

足元に転がってきたボールを園田が拾った。

俺の心臓は大変な騒ぎだった。ボールを追いかけていたせい心拍数が異常だ。

園田の腕が俺の方に伸びてきた。そしてボールを俺の顔に近づけて一言いったんだ。

俺は園田の声をよく知らない。

俺は園田の事を全く知らない。

ただ端麗に整った顔だけを知っている。

中身なんか知らない。

もしもこの気持ちが恋なのであれば、俺は園田の顔に恋をしていたんだ。

だからギャップに驚くことはない。顔と性格が全く一致するなんて事ありえないんだから。

「何？ジロジロ見ないでくれる？」

「あ！ゴメン！」

…とつさに謝ってしまった。俺にボールを渡すと園田は何もなかったように笑顔で女子のもとに帰っていった。さっきの声が嘘の様に、さっきの顔が嘘の様に。明るく、魅力的な表情で。

何だかシヨックだった。

何でだろう。俺嫌われてる??

そんな事ばかり考えているうちに、チャイムが鳴った。

おれんち

家にかえり、汗ばんだ体操服を袋から出すとツンとした臭いがした。青いカゴに勢いよく放り投げる。

「兄ちゃん失恋でもしたのかよ?」

そういつたのは俺の弟・一樹だ。

小2だと言うのに何とも憎らしい顔で聞いてきた。

どいつもこいつも高校生の悩み〓恋愛と思いやがって。(間違っていないけど)

「まあ兄ちゃんに彼女なんかいないよね」

悪気があるのか無いのかさっぱり分からない顔だ。

小学生の心理はよく分からない。

そう思っているとＴＶから『ダッターーン!!!!!!』という威勢のいい効果音が聞こえてきた。

その音に吸い寄せられるように一樹はＴＶに飛んでった。

そつだ。毎週木曜日の午後6時半から始まるヒーローものに彼は夢中なのだ。

この30分の間だけは彼の表情は夢見る少年そのものだ。

さて、俺は7時ごろの夕食タイムに向けて米をといで、冷凍のハンバーグを焼かなければならない。

今日は両親とも仕事だから仕方ない。

米をといでいるとき、ふと園田の顔を思い浮かべていた。

一瞬聴いた声も、驚くほど鮮明に思い出す。

俺は気のきつい女が嫌いなわけじゃない。

だからあの言葉にそれほどまで酷いショックは受けていない。

ただ、あの冷たい口調は俺に対してだけ使われているようだった。

女子と話をしている時の園田は別人のように優しい。

男子と喋っているところはあまり見ていないけど、なるほど普通に

話している。

俺は嫌われているのかもしれない。

俺は園田のことをあまりよく知らない。

顔が好きだ。

こんな不純な理由で人を好きになるべきでないのかも知れないな。

『ドツパアアーン!!!!!!!!!!』

TVからもれだす効果音が俺の意識を白いとき汁に浸されている米に戻させた。

「一樹ー。うるせえぞー」

TVに釘付けの弟の意識はヒーローを追っているようだ。
ただ小さな背中が左右に揺れている。

「ったく……」

今ごろ何をしているんだろう……。

食器を並べているとき、ハンバーグを焼いている時、何故想ってしまうのはそういう事なのだろう。

「兄ちゃん!!!!!!!!!!」

大きな声で俺の事を呼ぶ弟の目が……輝いていた。

こんな目をするときは決まってお願い事をするときだ。

「ん？もう7時か。ご飯にしないと」

はぐらかす様に言うのだが……全く通用しない。

「兄ちゃんー。お願いがあるんだけど……」

ほら来た。

「稲妻戦隊ライレンジャーの映画みたいの」

「映画??」

映画のお願いとは思っていなかった俺は少し驚いた。

また新しいお菓子を買ってくれとかそういう事だと思っていたんだ。

「稲妻戦隊っていったらさっきやってたＴＶのか？」

「うん！！！！！！！！！！」

力いっぱい返事した一樹の目がキラリツと輝いた。

ぐはっ、純粹パワー！

この目で見られる時大半は頼みを断れない。

今回もその大半に入ってしまった…

高校生男子が弟と日曜日に戦隊ものの映画を見に行くってのも寂しいよな…。

でも俺に頼むってことは両親が仕事で忙しいってこと分かってんだろ。

少し弟がかわいそうになった。

俺が出来る範囲のことはしてやるべきなのかもな。

そうこうしているうちに今日も終わる。

明日俺は何してるんだろ。

もう一回くらい話したいなあ。

ある雨の日

金曜日：今日でやっと長かった一週間が終わる。
家に居るからといって然して関係ないのだが。

キンコーンカーンコーン……

俺の望んでいたチャイムの音が学校中に鳴り響いた。

よし！家に帰ろうとバッグを持った瞬間、安藤に声をかけられた。

「極導、お前今日日直だろう？」

「へ？そうだけど？」

唐突な安藤の言葉に少し戸惑った。そして嫌な予感がした。

「今日は放課後掃除の日だから図書室に掃除にいつてくれ。」

………なんで俺だけが………

何て言える立場ではない！それは俺が一番よく知ってる。

だって今日何もしてなかったから。おんなじ日直の優等生・五島に
ゼーんぶおしつけたから。

安藤のやつ、ちゃんと見てやがったのか…。

雨のせいで廊下がすべる。図書室は校舎の外れにあるからなお更だ。
雨で湿った空気が灰を湿らす。

図書室に入ると湿気でもんわりとした空間があった。

驚くほど静かだ。俺しかない。

サボりたい衝動にかられたが、やることもないのでまじめに掃除を
する事にした。

しかしホウキが見当たらない。

その前に、掃除のロッカーが見付からない。

この高校の図書室は結構大きくて有名で、一度も入ったことのない

俺がいきなり掃除をしようというのも無理な話なのだ。

「あーホウキどこだよー」

ゴトンッ

俺がホウキを捜し歩いていると、隣の本棚の向こう側からにぎい音がした。

「…誰かいるのか？」

俺の声は静かに響いた。寒気を覚えた。だって此処には俺以外はいはずだから。

「誰だ!!!!!!!!!!」

自分の弱みを見せないように大きな声で叫んだ。そして本棚の向こう側にいる影をつかんだ！

……のだが。

「これ…ホウキ…」

そっいつて一本のホウキを俺に渡したのは、園田ユミ。その人だった。

目が点になっている俺を不思議そうに見る園田。

何かいわなければ！

「あ…ありがとう!!」

力いっぱい言った言葉がこれ。格好悪。いくつだよ…

「うん」

クスッと笑って、彼女は言った。

昨日とは別人のように、フンワリとした雰囲気だった。

どちらが本当の彼女なんだろう？

「園田、なんで居んの？」

率直な疑問をぶつけてみる事にした。

「いや…別に」

ハッとした様に園田の表情が少し固くなった事に気づいた。
どうしたんだろう？

チャンララーン ダダーーーン

そう思った瞬間に園田の携帯がなった。

俺から目を逸らす様に園田はいそいそと図書室を出て行った。

園田の態度の変化に違和感を感じた。

少し、何かに怯える様な目をしていたのだ。

彼女の足音が聞こえなくなると雨の音だけが寂しく鳴っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4263a/>

稲妻戦隊ライレンジャー

2011年1月13日02時33分発行